■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

17　若林幹夫「漱石のリアル　測量としての文学」

■目標　「象徴的な意味」を読み取り、適切に表現する。

■追跡

①　『こころ』という小説は、読解問題1〈家郷〉と〈東京〉を二つの極とする社会の地形を基本的なトポスとして成立している。主人公（の一人）である〈先生〉は、父母の病死と叔父の裏切りによって家郷とは縁を絶ち、残された財産を金銭に換え、その利子で東京で暮らすことを選択した人間である。（ここで〈先生〉を「主人公（の一人）」と書いたのは、〈私〉を主人公としてこの小説を読むことも可能であるからだ。）そして、利子生活者としての経済的な余裕が〈御嬢さん〉や〈K〉との関係のいわば〝原因〟となり、〈御嬢さん〉との結婚が決まった直後の〈K〉の自殺が、その後の〈先生〉の生に暗い翳を落とし続ける。〈K〉が自殺した後の〈先生〉の人生が、〈K〉を裏切り死に追いやったことに対する罪の意識に規定されているだけならば、この小説は〈過去〉の自分の罪に苦しむ近代的な自我を描いたごく普通の小説に過ぎないということになるだろう。だが、〈先生〉が〈私〉に宛てて書いた遺書の中にある次の言葉は、この小説がそうした〝心理〟とは別種の問題を扱っていることを示している。

ご存じ「こころ」。問いの力点は、「こころ」は、①〈過去〉の自分の罪に苦しむ近代的な自我を描いたものではない。②自分の罪に苦しむ、といった〈心理〉とは別種の問題を扱っている。それは何だろう？　それが問いだ。

この時点で示されていることがらは、「〈家郷〉と〈東京〉を二つの極とする社会の地形を基本的なトポスとして成立している」こと。「利子生活者としての経済的な余裕」がその後の展開の原因になっているように見えること。

読解問題1は最後に考えよう。

さて、その「次の言葉」を見てみよう。

②　同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていた所為でもありましょうが、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向って見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、――それでもまだ不充分でした。私はしまいにKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなかろうかと疑い出しました。そうしてまた慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横過り始めたからです。（『こころ』「下　先生と遺書」五十三）

③　「現実と理想の衝突」というのは、〈K〉の中での宗教的で求道者的な理想と〈御嬢さん〉に対する恋情との相克、あるいは、〈御嬢さん〉への恋情や、〈先生〉と〈御嬢さん〉との結婚に動揺する自分と、超俗的な自身の理想との間の相克のことである。「自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」（同、四十八）という〈K〉の遺書の文句は、こうした〝衝突〟が自らの自殺の原因であることを示唆している。それに対して〈先生〉が言う「淋しさ」は、『こころ』のテクストに即してみるならば、右の引用部分のすぐ前にある、大学卒業後に無為に読書をしていた〈先生〉が「何のために勉強するのか。」と妻から問われたことについて、「世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うと益悲しかったのです。私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事も能くありました。」（同、五十三）と述べている部分に対応していると考えることもできるだろう。だが、自分の弱点や罪を身近な人にも告白することができないという、〝臆病な自尊心〟と〝尊大な羞恥心〟とでも言うべき心理的な葛藤によって〈K〉や〈先生〉が自殺したのだという説明は〝分かりやすい過ぎる〟。遺書の最後に近い部分で述べられる次の言葉は、少なくとも〈先生〉の自殺の理由がそうした分かりやすさとは異質なものであることを示唆している。

整理。自死の理由「自分の弱点や罪を身近な人にも告白することができなかったから」ではない。「分かりやすさとは異質なもの」だ。その根拠は次の言葉。やはり、次の言葉を見てみよう。

④　私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないように、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。あるいは個人の持って生れた性格の相違といった方が確かも知れません。私は私の出来る限りこの不可思議な私というものを、貴方に解らせるように、今までの叙述で己れを尽したつもりです。（『こころ』「下　先生と遺書」五十六）

⑤　〈私〉に〈先生〉の自殺の理由がよく分からないかもしれないように、〈先生〉にも〈K〉の自殺の理由がよく分からず、それを推測し続けるしかない。にもかかわらず、そのよく分からない自殺がそれ以後の生に決定的な翳を落とし続けただけではない。〈先生〉にとって〈K〉の自殺は、〈先生〉の家郷との決別がもたらした金銭的な余裕が生み出した一連の過程の〝結末〟であるという意味でそれ以前の〈先生〉の〈過去〉を集約し、総括する出来事でもある。それは〈先生〉の人生の時間の風景の中で、その出来事の〈意味〉が完全には理解しえないにもかかわらず、それ以前の〈過去〉がその一点に向けて流れ、それ以後の〈未来〉がその一点から投げかけられる翳に規定され続けるという意味で、特

遺書」五十三）

異な結節点を構成しているのである。読解問題2〈先生〉にとって自分の人生は、〈K〉の死というこの特異な点をいわば〝原点〟とし、それを基準として意味づけられるような〝時間の地形〟の広がりとして見出だされているのである。

自殺の理由自体は、「よくわからないもの」としか書かれていない。ただ、「Kの自死という出来事」の、〈先生〉の人生にとっての意味、位置づけが示される。

「Kの自死という出来事は、〈先生〉のそれまでの生の一つの結末。かつ、その後の〈先生〉の生を規定する出来事」だ。〈先生〉にとって、自分の生はそのように見えている。

読解問題2　「〈先生〉にとって自分の人生は、〈K〉の死というこの特異な点をいわば〝原点〟とし、それを基準として意味づけられるような〝時間の地形〟の広がりとして見出だされているのである」とはどのようなことか。

〈先生〉にとってKの自死はどういう意味を持っていたのか、という形で書き直せばよい。

【解答例】〈先生〉にとってKの自死という出来事は、その理由がよくわからないものであり続けているが、自分の人生にとっては、それまでの生の一つの結末であり、その後の生を規定する特別な意味を持つ出来事だと捉えられている、ということ。

⑥　叔父に裏切られた〈先生〉は家郷から決別するために家産を金銭に換えてしまう。それは、家郷における居場所としての「財産」を「富」に換えるということだ。近代的な市場社会は財産を富へと変換しながら、過去に由来する社会の風景を切り崩していったのだが、〈先生〉は自分から財産を富へと変換することで、過去としての家郷との関係を〝決済〟したのである。別の言い方をすれば、読解問題3それは父母亡き後で家長であったはずの〈先生〉による〝家の自殺〟である。叔父の言うままに従妹と結婚すれば、叔父の実質的な支配下にあるとしても、家は文字通り「家屋敷」として存続し続けたことだろう。だが、家産を金銭に換えてしまえば、明治民法上の家は存続しても家郷の村における家屋敷は消滅する。「私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。」（「下　先生と遺書」九）という〈先生〉の言葉は、父母の墓が同時にまた自殺した家の墓でもあることを示している。

⑦　家の自殺は、〈先生〉が家郷の共同体や家による統制や抑圧から自由な、自己の身体と財産を自己自身のみで所有し処分することができる近代的な〝個人〟になったということでもある。家の自殺と家郷からの離脱、そして個人の誕生が、ハイデガーの言う意味での〈不気味さ〉に通じることは言うまでもない。その頃の自分の心境を語る〈先生〉の次の言葉は、そうした個人の前に広がる世界の相貌がどのようなものであったのかを示している。

読解問題3　「それは父母亡き後で家長であったはずの〈先生〉による〝家の自殺〟である」とあるが、「家の自殺」とはどのようなことか。

直接的には故郷を捨てたことだが、該当する箇所を拾い集めてみよう。

「家郷における居場所としての「財産」を「富」に換える」

「過去としての家郷との関係を〝決済〟した」

「家郷の村における家屋敷は消滅する」

「〈先生〉が家郷の共同体や家による統制や抑圧から自由な、自己の身体と財産を自己自身のみで所有し処分することができる近代的な〝個人〟になったということ」

この要素をつなぐ。〈時間順〉の論理で整理するといい。

【解答例】〈先生〉自身が、家郷の村の家屋敷をお金に換え、故郷での居場所を消滅させたことによって、逆に、家郷の共同体や家による統制や抑圧から自由な、自己の身体と財産を自己自身のみで所有し処分することができる近代的な個人になったということ。

⑧　私の気分は国を立つ時既に厭世的になっていました。他は頼りにならないものだという観念が、その時骨の中まで染み込んでしまったように思われたのです。私は私の敵視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者の如く考え出しました。汽車へ乗ってさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向こうから話し掛けられでもすると、なおの事警戒を加えたくなりました。私の心は沈鬱でした。鉛を呑んだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今いった如くに鋭どく尖ってしまったのです。

⑨　私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな源因になっているように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えて見る気にもなったのだといえばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懐中に余裕が出来ても、好んでそんな面倒な真似はしなかったでしょう。（同、十二）

引用が続く。家郷から離れたときの心境。

⑩　「この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥れたのです。」（同、九）と〈先生〉が述べるように、この〝決済＝家の自殺〟の結果〈先生〉は軍人の未亡人母娘の家に下宿し、さらに同郷の友人〈K〉をそこに引き込むことになる。当初は〈御嬢さん〉に惹かれながらもその母親である〈奥さん〉に対しては、自分の財産目当てに娘と近づけようとするのではないかと警戒の念を解かなかった〈先生〉は、将来の結婚問題を宙づりにしながらその母娘と擬似的な家族のような関係を生き始める。それは、「親しみ」があ

って「居心地のよい」、「気の置けない」という意味でのheimlichな場所を、〈先生〉がその母娘の下宿に見出だし始めたということだ。そして、家郷の養家及び実家と関係がこじれ、養家から実家に戻され、さらに実家からも事実上勘当されて困窮し、神経衰弱になりつつあった友人の〈K〉をこのheimlichな場所に引き込んで、より「人間らしく」しようとしたのである。〈先生〉はそれを、「私は氷を日向へ出して溶かす工夫をしたのです。今に融けて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違いないと思ったのです。」（同、二十三）、「私は奥さんからそういう風に取扱われた結果、段々快活になって来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようと試みたのです。」（同、二十四）と説明している。

よく教科書に採られる場面の前、Kがやってくるまでの経緯。家族を失った〈私〉とKは、「擬似的な家族のような関係」に再び引き込まれる。〈先生〉自身の言葉によれば、Kを招いたのは、Kを神経衰弱から救い、人間らしく、快活にしてやるためだった。

⑪ だが、〈K〉を自分の下宿に引き入れた〈先生〉の振る舞いを、小森陽一の次の指摘のように理解することもまた可能である。

⑫ 「先生」にとって、「Kと一所に」住むことが重要だったのではない。「K」の生活に必要な「月々の費用」を自分が支払うことに主眼は置かれていたのである。けれども「K」の「独立心」が強いことを知っていた「先生」は、「K」に内緒のまま、彼の「食料」をそれと知られぬまま「奥さん」に支払おうとしていたのである。つまり「先生」は、「K」と「奥さん」の両方をだましてまでも、「K」が経済的に「独立」している状態を崩そうとしたことになる。何のためか。

おお、そんな見方があるのか！　〈先生〉は、Kを経済的に独立させないようにした。なぜ？

⑬ それは、とりもなおさず、「K」の「独立」を阻み、「K」の生活を、あたかも扶養者である「父」のように支配するためであり、その経済的な支え、「食料」を支払うという一点において、あらゆる面で「先生」より「独立」していた「K」に対して優位に立とうとしたためである。そして、「先生」が、「二人前の食料」を支払うことが可能だったのは、ほかでもない、「先生」の「父」の死によって残された遺産、「先生」が「叔父」に「胡魔化」されたという遺産の残りを、すべて「金銭」に代え、銀行に預けたことによって手にすることが出来るようになった月々の「利子」のおかげなのである。

答えは、「Kに対して優位に立ち、支配するため」。

⑭ 必ずしも意識的に〈K〉を金銭によって支配しようとしたのではないが、〈先生〉の行為は結果的に小森が指摘するような〈K〉に対する支配として現れてこざるをえない。そうだとすると、「叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他を悪く取るだけあって、自分はまだ確かな気がしていました。世間はどうあろうともこの己は立派な人間だという信念が何処かにあったのです。それがKのために美事に破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。」（「下　先生と遺書」五十二）という遺書の中の〈先生〉の言葉や、〈先生〉が〈私〉に対して言った「私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用出来ないから、人も信用できないようになっているのです。自分を呪うより外に仕方がないのです。」や「いや考えたんじゃない。遣ったんです。遣った後で驚いたんです。そうして非常に怖くなったんです。」（「上　先生と私」十四）といった言葉は、〈K〉を出し抜いて〈御嬢さん〉と婚約し自殺へと追いやったことだけでなく、〈先生〉が〈K〉を庇護し、経済的に支えようとしたこと自体をも指し示していることになる。〈K〉に対して誠実かつ親身な存在たろうとする行為を通じて〈先生〉は自ら意識しないまま、すなわち無意識のうちに〈K〉を支配しようとしてしまう。

自分で自分が信用できない。おれは気づかないまま、Kを金銭によって支配しようとしていた。自分の欲望を満たすために、金銭の力を利用しようとするのは、あの叔父とそっくりじゃないか。

⑮ 「自分もあの叔父と同じ人間だと意識した」とは、故郷から縁を切り、家を自殺させ、あるいは家から自らを放逐することを通じて生み出された個人と個人――〈先生〉と〈K〉――の間に、家と家郷に縛られていたのと同様の支配や抑圧が、それと意識せぬままに回帰したということだ。その回帰に〈先生〉は、〈K〉の死の後で初めて、その死の〝分からなさ〟について考えるなかで気づく。それは、自らのなした行為の意味が自身の意図によってではなく、他者との関係の中で与えられるということ、しかもその行為の意味が、その行為が過去のものとなった後から次第に明確な像を結び始めたということだ。〈先生〉にとって、自らの家の自殺から〈K〉の自殺までの間の自身の行為の意味は、〈K〉の自殺の後で、その自殺の理由の「分からなさ」について考えることを通じて初めて結像し始める。この時〈先生〉は自身の行為の意味を、自身の心理や意図を超えたもの、確かに自分自身がおこなったものでありながら、した後から驚き、恐怖を感じるような異和をもつものとして見出だざるをえない。〈先生〉にとって〈K〉の自殺という出来事は、「私は何を為したか。」「私は何者か。」という問いとそれに対する答えを、自分自身の意識や主観に対して異和的でありながら、〈過去〉――〈現在〉――〈未来〉を貫通するものとして突きつけてくるような出来事なのだ。

Kはなぜ死んだのだ？　そんなこと（恋の裏切り）で彼は死ぬようなヤツだったのか？

おれのせいでKは死んだのか？
お前はどんなやつなんだ？
おれはそんなに悪い人間じゃない。あんな叔父のようではない。
ほんとうか？　お前は、お金によってKを支配しようとしていたのではないのか？

無意識に何事かをしでかしてしまう。それが、後から、とんでもない結果をもたらす。そのときに初めて、自分が何をしたのか、自分はどんな人間なのか、知ることになる。
ひとは生きれば生きるほど、これに似た経験をしないわけにはいかない。「こころ」が読まれ続けるのは、最も深いところから、読み手それぞれに、その〈運命〉を握っている、しかし、読み手それぞれの意識を超えた、〈過去〉―〈現在〉―〈未来〉を貫通する黒い光のようなものの存在に触れさせるからである。

読解問題1　「〈家郷〉と〈東京〉を二つの極とする社会の地形を基本的なトポスとして成立している」とはどのようなことか。

トポスとは、場所。ギリシア語。
『『こころ』という小説は、〈家郷〉と〈東京〉を二つの極とする社会の地形を基本的なトポス（場）として成立している」という文全体を、この文章全体の主旨を踏まえて説明してみよう。
⑮段落で示された結論は、
「自分もあの叔父と同じ人間だと意識した」という、その気づきは、
「故郷から縁を切り、家を自殺させ、あるいは家から自らを放逐することを通じて生み出された個人と個人――〈先生〉と〈K〉――の間に、家と家郷に縛られていたのと同様の支配や抑圧が、それと意識せぬままに回帰したということ」を意味する、というもの。
〈家〉から（〈東京〉へ）出たつもりだったのに、〈家〉から出てはいなかった。
いいかえれば、
お金、父権、力によって人をだましたり、支配したりする（否定すべき）人間のあり方を否定し、それから解放され、自由に個人になったつもりだったのに、気づけば、かつて否定した人間のように、力によって人をだましたり、支配したりする人間のままであった。
「こころ」では、〈家郷〉と〈東京〉という場所は、それぞれ、人を縛り支配する場所、個人として自由になる場所、という意味を帯びている。そして、物語（先生の遺書）全体は、人を縛り支配する場所から出て、再び、人を縛り支配する場所へ戻る（というか、出られていなかった）ストーリーになっている。場所、が、人間のあり方、と重ねられているのである。

【解答例1】『こころ』という小説は、力によって人を支配しようとする場所としての〈家郷〉と、そこから逃れ、個として自由に生きる場所としての〈東京〉の間を移動することを軸として構成されている。それは、たんに物理的に〈私〉が〈家郷〉を捨て、〈東京〉へ出たという一方通行の移動を意味するのではなく、人をだまし支配する罪を自分が犯してしまっていたことに気づく形で、否定したはずの場所に再び戻っていた物語として描かれている、ということ。

【解答例2】〈家郷〉という支配や抑圧の場から、〈東京〉という、自由な個として生きる場への移動という筋は、実は、〈家〉のように親密な場において、無意識のうちに、友人をだまし、支配しようとする、自分が否定していた行為を繰り返す結果を導いていたことを示すための枠組みになっているということ。

■**読解問題**
1　「〈家郷〉と〈東京〉を二つの極とする社会の地形を基本的なトポスとして成立している」とはどのようなことか。
2　「〈先生〉にとって自分の人生は、〈K〉の死というこの特異な点をいわば〝原点〟とし、それを基準として意味づけられるような〝時間の地形〟の広がりとして見出だされているのである」とはどのようなことか。
3　「それは父母亡き後で家長であったはずの〈先生〉による〝家の自殺〟である」とあるが、「家の自殺」とはどのようなことか。

■**発展問題**
●「Kを支配しようとしていた」という観点に立って、教科書で読んだ、Kが自死に至る過程を論じ直しなさい。

●重要語「無意識」＝日常の行動や精神に影響を与えている心の深層。この定義は、『現代文キーワード読解』によるもの。心理学でも、無意識は扱うが、この漱石論で使われている無意識は、たんに意識に上らない、とか、記憶にない、といったレベルのことではない。この身体や人間関係や社会や時代、自然環境を含めた、深く大きく、耳には聞こえない、恐ろしい音を立てて顫動し、流れているもの。その層に触れてしまう、「ぞっとした感じ」が、あの小説には感じられる。